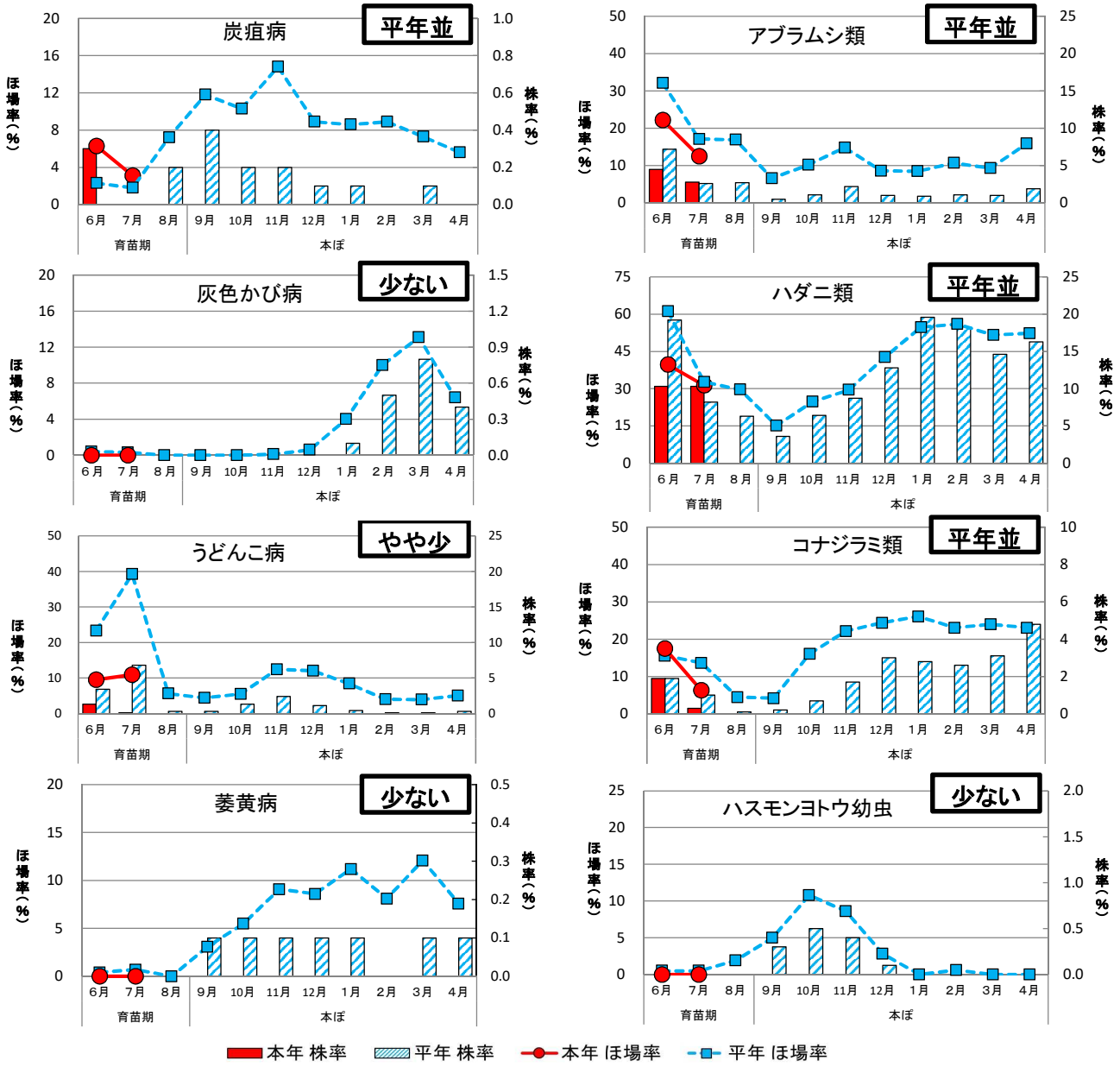
いちご病害虫情報第２号（７月）

令和４(2022)年７月22日
栃木県農業環境指導センター

■　病害虫の発生状況　　【総調査ほ場数：64 か所 】



※ほ場あたり25株調査　※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株　※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■　今月の防除ポイント

ー　育苗期のハダニ類防除　ー

ハダニ類は平年並の発生量となっています。親株、子苗ともハダニ類の発生が見られ、多いところでは７割以上の株に発生しています。本ぽへの持ち込みを防ぐため、育苗時の防除を徹底しましょう。

1．育苗期の薬剤散布にあたっては、収穫前使用日数の長いトクチオン乳剤（Ⅰ:11(B)収穫75日前まで）やアグリメック（Ⅰ:6　親株育成期、育苗期）等を散布しましょう。また、モベントフロアブル（Ⅰ:23）を育苗期後半から定植当日に灌注しましょう。
2．天敵導入にあたっては、天敵に影響の少ない薬剤を計画的に散布しましょう。
3．薬剤抵抗性の発達を防ぐために、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
4．定植苗の高濃度炭酸ガス処理を適切に行い、本ぽへのハダニ類の持込みを抑えましょう。

■　今月のトピックス　炭疽病

被害症状について

炭疽病は、育苗期に発生することが多いイチゴの重要病害のひとつです。

本病の病原は、糸状菌の*Glomerella cingulata*（ グロメレラ シングラータ）（生育適温28℃前後）と*Colletotrichum acutatum*（コレトトリカム アキテータム）（同25℃前後）で、前者による被害が大きいです。病徴は、葉身の黒色小斑点、クラウンの褐変及び高温下の萎凋（*Glomerella cingulata*）、葉縁の黒色不整形の大型病斑及び実腐れ（*Colletotrichum acutatum*）、葉柄やランナーの黒色陥没病斑（両病原共通）が見られます。

本病の特徴的な症状としては、クラウン内部にまで褐変し、特徴的な鮭肉色の胞子塊を形成します。

本病は高温多湿で発生が多く、罹病残渣や発病株から分生子が降雨やかん水等の水はねによって飛散し伝染します。また、育苗中に本病の発生が見られる場合は、発病株の周辺株で症状が見られない場合でも感染（潜在感染株）していることがあるため注意が必要です。

葉身の黒色小斑点

葉柄の黒色陥没病斑

クラウンの褐変
（外部から内部に向かって褐変します）

親株の萎凋

防除対策について

本病は、風媒伝染や土壌伝染で発生することから下記のことに注意して栽培する。

１．育苗時には、頭上かん水や、水がはね上がるかん水は行わない。
２．発病が確認された株を速やかに取り除き、施設外で適切に処分する。
３．長雨や台風等の前後に重点的に予防散布を行う。
４．耐性菌発生防止のため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
５．発病株の周辺株は本病の症状が見られない場合でも感染（潜在感染株）していることがあるので、定植苗として使用しない。